大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

2017年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東田, 卓, 鯵坂, 誠之, 金田, 忠裕, 北野, 健一, 坂井, 二三絵, 佐藤, 修, 西岡, 求, 古田, 和久, 松野, 高典 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007508

2017 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

東田卓[*1]，鯵坂誠之[**]，金田忠裕[***3]，北野健一[****4]，坂井二三絵[****4]，佐藤修[****4]，西岡求[*1]，古田和久[*****5]，松野高典[****4]

A Report on the Workshop of Academic Portfolio in 2017

Suguru HIGASHIDA[*], Shigeyuki AJISAKA[**], Tadahiro KANEDA[***3], Ken'ichi KITANO[****4], Fumie SAKAI[****4], Osamu SATOU[****4], Motomu NISHIOKA[*1], Kazuhisa FURUTA[*****5] and Takanori MATSUNO[****4]

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校では，教育改善の一環として 2009 年よりティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催している．さらに，2012 年からはティーチング・ポートフォリオ作成者を対象として，アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを同時に開催している．本稿では，2017 年度のアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップの概要を説明した後，ワークショップ参加者の感想と考察を報告する．

キーワード: アカデミック・ポートフォリオ，教育改善，統合

1．はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下，本校と略す）は教育改善の一環として 2009 年よりティーチング・ポートフォリオ（以下，TP と略す）の作成に取り組んでいる[1]．これに対してアカデミック・ポートフォリオ（以下，AP と略す）とは，「教育，研究，サービス活動（社会貢献・管理運営等）の業績についての自己省察による記述部分およびその記述を裏付ける根拠資料の集合体であり，教員の最も重要な成果に関する情報をまとめた記録」である[2]．

2012 年 1 月 4〜6 日に大学評価・学位授与機構小平本部で AP 作成ワークショップが開催された．このときの手法を踏襲して，AP 作成ワークショップ（以下，WS と略す）を開催した．それ以降 APWS は毎年開催され，2017 年に本校で第 12 回及び第 13 回の APWS を開催した．本稿では，その WS の実践並びに考察を報告する[3]．

2015 年度，文部科学省では大学における教育内容等の改革状況についてまとめている．本校でも積極的に推進しているアクティブラーニングの取り組みは全国で 2013 年から 2015 年にかけて 27%から 42%に急増しているが，TP を導入する大学は 2012 から横ばいで約 24%にとどまっており，AP の導入大学はさらに少ないと予想される[4]．このように全国では WS の取り組みが少ない中で，本校はこれまで 13 回の APWS を行い，積極的に学内外のメンティーならびにメンターを育てていることを強調したい．

2．アカデミック・ポートフォリオについて[2]

本校で実施している APWS は事前に TP を書いた人を対象に 3 日間で AP を完成させる WS である．これまでに我々は大学院生版 アカデミック・ポートフォリオ（GSAP: Graduate Student Academic Portfolio）を紹介[3]してきたが，本校では通常の AP だけで定員が埋まってしまうため，今年度は SAP ならびに GSAP の募集は行わなかった．AP の最大の特徴は，教育・研究・サービス活動，互いの連携・寄与について考察する「統合」の章にある．また，これまでの成果から最も自

2018 年 8 月 20 日 受理

総合工学システム学科　環境物質化学コース*1（Dept. of Technological Systems：Environmental and Materials Chemistry Course）
**2 都市環境コース（Civil Engineering and Environment Course）
***3　メカトロニクスコース（Mechatronics Course）
****4 一般科目（General Education）
*****5　機械システムコース（Mechanical Systems Course）

分が誇りに思うものを 3 つあげて記すこともAP の大きな特徴である（これは，教育 1 つ，研究 1 つ，サービス活動 1 つと決まっているわけではなく，教育を重要視する教員ならば教育から 3 つ選ぶ等，教員の活動スタイルにあわせることができる）．さらに，将来達成したい目標を 3 つ記す点も単純な「業績リスト」と大きく異なる点である．これらを十分な自己省察を行いながら記述していく[2]．

本校では教員の採用及び昇任・昇格時にTPまたはTPに準ずる文書の提出が義務付けられている．既に TP を執筆したものはTP 更新WS に参加して更新するか，新たにAP 執筆をしなければならない．今回，夏のWS のAP メンティーに本校教員が多いのは昇任・昇格を控え，自発的に AP 執筆による教育改善をしたものと考えている．本校の FD 活動として教員の自発的な教育改善が求められており，TP・APWS への積極的な参加は本校の教育改善の表れと考えられる．

法人の中でも研究に比べ教育に重きが置かれた府大高専として，教育改善としてのTP，AP の執筆の必然性は更に高くなっている．今後は昇任を期に徐々に AP執筆率が 100%に近づくものと期待される．

3．作成ワークショップ

表 1　2017 年度に開催したAP 作成WS の概要

回	日程	メンティー	メンター	スーパーバイザー
12	8 月 8 日～10 日	7 名（うち学外 2 名）	6 名（うち学外 3 名）	2 名(学外)
13	12 月 26 日～28 日	1 名（学外）	1 名	北野健一

表 2　AP 作成WS のおもなスケジュール

	12 月 26 日	12 月 27 日	12 月 28 日
午前		個人ミーティング(2) AP 作成作業	個人ミーティング(4) AP 作成作業
午後	オリエンテーション AP チャート作成 個人ミーティング(1) AP 作成作業	個人ミーティング(3) AP 作成作業	AP 作成作業 プレゼン準備 AP プレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会：意見交換会 AP 作成作業	AP 作成作業	修了を祝う会

2017 年度は本校では 2 回の TP・AP・SP 作成WS を行った．AP 作成WS の概要を表 1 に，WS の主なスケジュールを表 2 に示した．

4．AP 作成の実際

4.1　メンティーとして

上野哲　2016 年 12 月にTP を，また 2017 年 8 月にAP を作成した．しかし，2018 年 7 月現在，TP は 2 回更新しているのに対して，AP はまだ一度も更新していない．

TP 作成もAP 作成も私にとっては義務ではなく，教育に携わっている者として自分の教育姿勢や教育方針を明確にしておきたいという一心で自発的に書き上げた．これまで，昇進や昇給のための材料としてTP，AP を利用したことはなく，その必要もなかった．

TP 作成とAP 作成のどちらが楽しかったかと問われれば，「TP を作成した時だ」と答えるだろう．TP を作成した時は筆が止まるということはなく，新鮮な感覚でこだわりをもって，自分の考えを整理していく楽しさがあった．一方，AP を作成した時はなかなか筆が進まず，部屋に備え付けのコーヒーばかり飲み，メンターの先生との会話もいつまでも集約されずまとまらないまま，という状態が最後まで続いた．しかもそれほど苦労して作成したAP なのに，TP に比べると愛着感も少なく，前述したように，結局一度も更新できていない．この違いは一体何に起因しているのだろうか．

自分では原因はわかっている．最大の原因は，TP では自分がこだわりをもっている「教育」や「研究」に関する主観をある程度整理して客観視できるようにする作業がメインだったのに対して，AP では私自身があまり意義を見いだせていない「中堅教員として学校運営にどのように携わるか」について，建前上のことも含めて考えなければならない，と自分自身で思い込んでしまったことにある．その結果，TP 作成の時に比べて，作成の楽しさや喜びは半減し，まるで職場研修会に嫌々参加している時のような，本音を封印し聞こえのよい言葉だけを並べているような状況に陥ってしまった．

もう一度 AP を作成する機会があれば，できる限り建前を封印して，例えば「書きたくないことは書かない（「書く必要があることであっても，自分を偽り本音を封印して建前を書くよりはマシ」と考える）」という方針で作成を進めていきたい．少なくとも，作成作業中に少しは楽しみや喜びを感じられるような，そして作成後も自身の行動を振り返ったり反省したり客観視するためのきっかけになるものを作りたい．

馬本勉　APWS に参加した 2017 年 12 月 26 日から 28 日までは，私にとって忘れられない3日間となりました．私はAP の冒頭にこう記しています．

ティーチング・ポートフォリオの作成（2016 年 8 月）が，当時の私に「教師としての原点」を思い出させてくれたように，アカデミック・ポートフォリオは「大学人としての私」の骨組みを再認識させ，道を照らしてくれることと思う．

この趣旨は，初日に提出した第一稿から一貫しています．

2016 年夏，TPWS の 3 日間は英語教師である私の「教育理念」を言語化する，苦しくも楽しい時間でした．2017 年の年末に AP で試みた「教育・研究・サービス活動 3 者の統合」と「私の〈核〉探し」は，費やした時間のすべてが「重く，深い充実感」に満ちた省察の機会となりました．英語教師としてだけでなく，研究者として，また大学教育改革を担う一人として，「対話的（Communicative）」「学術的（Academic）」「責任ある（Responsible）」という，３つの形容詞で表せる教育・研究・サービス活動を実践（Practice）すること．この目標に辿り着きました．何度も AP を読み返し，具体的な行動に努めています．とりわけサービス活動の一つ，大学運営に向き合う上での覚悟が芽生え，モティベーションの維持につながっています．

自分で書いておきながら何ですが，次の一文は，私の AP の中で最も印象に残る箇所です．

アカデミック・ポートフォリオの作成過程で，私の内側から最も強く浮き上がってきた言葉が，この「責任ある」というものであった．

大学人として自由でありたいとの思いから，つい避けてきた（けれど決して避けて通れない）ものであり，それゆえ「もやもや」の原因ともなっていました．AP のお陰でこれまで言語化できなかった「核心」が，具体的な姿をもって現れました．引き出してくださったメンターの方には，本当に感謝しています．

メンターが常に安心して話せる雰囲気作りをしてくださったこと．私と同じようなジレンマを経験されていたこと．異なる職場の方であったこと．これらは皆，本音で語ることができ，多くの気付きに至った要因であろうと思います．いつか私がメンターを務めることがあれば，ぜひお手本にしたい．こうした出会いにも感謝しています．

坂井二三絵　本校で働き始めた 2012 年に初めて TP を作成し，担任を経験した 2 年後に TP を更新，副主事を経験中の今回 AP を書くことになった．TP・AP の作成は，いずれも，これまで自分のやってきたことの振り返りが中心にある．メンターの先生に，自分のしてきた教育・研究・校務分掌などについて話しているうちに，「自分が何を大切にしているか」が見えてくる，ということを３回とも経験した．日々授業準備や雑務をこなすので精一杯の私にとっては，普段あまり意識していないことに気づく機会だったといえる．ただ，私にとっては，TP・AP どちらも，自分のやってきたことの成果よりも，できていないことの方に目が向いた．これを書き上げたら，もう少し努力しないといけないな，という焦りを感じた．そのため，これまでの経験をまとめて理念を見つけ出すことよりも，自分が今何を始めたいのか，ということを確認し，実行するエンジンとなったことに意義があった．

TP 更新の際は，知っている学生が増え，就職試験用の書類作成について相談されるようになった頃だった．正直言って，当時私は高専生にとっての正しい就職書類の書き方がよくわからなかった．まず自分が書き方を学ばないと，と思っていたときに TP の更新の機会があり，それを今後の目標に書いた．すると，WS の発表会で，何人ものコースの先生たちが協力しようと申し出てくださった．その後，勉強会などを通して，高専生にふさわしい自己アピールなどの書き方を少しずつ学ぶことができた．どのような手順で指導していけば，個性の異なる学生みながよい自己紹介書に辿り着けるのかは今も模索中だが，コースの先生方とこのテーマで何度も話し合えたことが大きな実りだった．

今回の AP にも，私のなかでもやもやしていたことを今後の目標として書くことになった．それは，特徴ある学生への国語教育という課題である．文章の読解や言葉によるコミュニケーションを特に苦手とする特徴を持つ学生を，どう指導すればいいのかにここ数年直面してきた．彼らが困っていることはわかっていても，どうすればよいかわからない．そういう学生に向き合うのはとても難しくて，避けている部分があった．だが，AP で今後の目標を書く段になり，このことが浮かんできてしまった．だから，少しずつでも自分なりに，彼らによい方法を探してみようと思うことになった．そして，今年度から，そういう学生向けに個別で補習を始めた．

これが，今回の AP 作成の最も大きい意義だったと思う．足りていない所や，改善せねばならない所を自覚して，前に進むこと．TP や AP を書くことの意義は人それぞれだと思うが，私にとっては，今自分が何をすべきか，を自分に確認することにあるようだ．

佐藤修　私は2010年にTPWSに参加しました．そして，去年2017年には再びWSに参加し，APを作成しました．実は，WS に参加するまでは，様々な分野で「標準化」が言われるようになってきている中，参加することで，ある種統一的な価値観に誘導されていくのではないかという心配から，あまり積極的には関わらないようにしようと決めていました．しかし実際にはそのような心配は

杞憂に過ぎず，むしろ各個人の個性を際立たせる方向にポートフォリオ作成の作業が進んでいったと思います．今回の AP 作成のために，まず，以前に作成した TP を下書きレベルで最新版に更新し，それに加えて研究活動，校務分掌，社会貢献などそれぞれについて，メンターの助言の下でまとめあげ，相互の関連性について考察しました．そこで再確認できたこととは，教育においても，研究活動は非常に重要であることです．研究内容やその成果の大小は問わず，研究に携わることによって得られるものは大きく，そこで得た技術や知識は十分授業に還元されていることです．また AP の作成を通じて，職務上の自らの姿勢を客観的に自己分析できました．特に教育活動の点については，自分の強みの部分をより生かす形で，授業やクラス運営をすればよいことを，より一層強く思うようになりました．ですから，私も他者に助言するときには，自分のやりかたや信念を相手に強く押しつけないように留意すること，そして自分の価値観や仕事に照らし合わせて，他人の教育方法，理念などをむやみに批判しないことも重要であると，より一層思うようになりました．

府大高専で行われる WS では，自由参加ですが懇親会の存在も非常に大きいと思います．もちろん文字通り親睦を図るという役割もありますが，学会や研究会での懇親会とは異なり，WS の懇親会では，多様な専門分野，職業の方々が集まって，その中で気楽にお話ができます．そこでは，様々な視点から見た考え方を聞くことができますので，非常に参考になります．

私は AP の内容をホームページ(HP)上に掲載することによって，教育のとりくみや研究成果の情報公開，そして学生に向けては教育理念や教育方針の提示をしようと考えてはいたのですが，断念しました．理由は，自らの授業評価アンケートの点数が何点であるとか，教育に対するとりくみをあからさまに学生に対して示すことは，今の日本の土壌には馴染まないのではないかと思ったからです．しかし，将来的には何らかの形で公開できたら良いと思っています．

西岡求　2017 年夏の TP・AP WS において初めて AP を作成した．昇任人事に係る提出書類として TP もしくは AP の提出が求められていたからであるが，2009 年度に初めて TP を作成し，2013 年度に一度 TP 更新をしていたこと，教育以外にも外部資金による研究活動，教務副主事として成績処理や入試など教務関係の校務を行っていたことから AP を作成するための十分な材料がそろっていたことが大きな決め手となった．WS には作成者（メンティー）として二回（更新時は個別対応だったのでノーカウント），TP メンターとして二回参加したことになるが，そこで感じたことを二つ挙げたいと思う．

一つ目はメンターとの関係性である．TP・AP はメンティーが作成するものであるが，メンターとメンティーの協同作業的な要素が強調されている（特に TP・AP の紹介ではそのように感じる）．協同作業的という観点では，作家（漫画家）と編集者，あるいはスポーツ選手とコーチの関係と似ていると言える．メンティーの多くは，メンターとの対話が重要であったとかメンターの助言がなければとてもまとまらなかったという感想を WS 終了時に持つようだが，私自身は「TP・AP の校正を手伝っていただきありがとうございました．」というのが抱いた感想である．もちろん，専門性も場合によっては働いている環境も異なる方と自身の TP・AP の骨格となる考えなどを話すのは楽しい時間であるし，新たな発見（というほど大げさなものではないが）もあったりする．メンティーが TP・AP を「作品」のように磨きあげたものにしたいのなら作家（漫画家）と編集者のような関係性をメンターとの間に求めればよいし，某公務員ランナーのように全て自分で決められるのなら評価（校正）の役割をメンターに期待すれば良いのではと考えている．

二つ目は，TP における教育理念，AP における 4 分野に共通する理念の必要性である．教育理念を持ち合わせていないという教員はおそらくいないので，AP に含まれる 4 分野に共通する理念をどのように導き出すのかが AP 作成者には大きな難題のようである．上述の AP メンターに期待される役割の重要な事柄の一つでもある．AP の基本モデルではなぜか共通する理念があることが当然とされているが，実際にはそれぞれの領域を違う考え方のベクトルで実践している場合も多いのではないだろうか．AP の基本モデルが欧米のアカデミック発祥ということもあるのかもしれないが，この部分にもっと柔軟性があれば良いのではないかと思う．

古田和久　TP を執筆したのは，本校に着任した 2015 年の夏であった．それまで高等教育機関を含めた一切の教育経験がなかったため，「教育の理念」を自分の中から見つけ出すことに非常に苦慮したこと，また，ようやく自分の心の奥に眠っていた「教育の理念」の一端を見いだせたことに喜びを感じたことを良く覚えている．

今回 AP を書くきっかけは人事に係る要請からではあったが，TP を作成してから 2 年が経ち，第 3 学年担任という初めての主要な校務を受け持ったり，企業との商品開発や技術相談といった地域連携をしたりと，教育・研究・サービスを経験したことから，まだまだ経験値としては少ないが，積極的に AP を書いてみることとした．ただ，前述のように元々アカデミックな世界や研究機関に所属したことがなかったために，10 年近く前に学位を

取得して以降の研究成果のエビデンスとなる論文などがほとんど無いことが最大の懸念事項であった.

AP 執筆に着手するにあたり，教育に関して振り返ったところ，TP 執筆時から理念は変わっていなかった．しかし，AP チャートを作成していると，教育が研究やサービスとどのように関係しているのかを見出すことに意外と苦心した．とりわけ「サービス」に関して，「教育」と「研究」との境界や重複部が何処にあるのか，簡単なベン図を描いてもなかなか見いだせなかった．付箋から糊がなくなるくらい，付箋を貼っては剥がしを繰り返した.

メンタリングにおいても，「教育」，「研究」，「サービス」の境界線，重複部は何処かが主であった．今となっては思い出せないが，私は「サービス」という言葉について，何かしらの誤解をしていたようであった．そこがクリアになり，3 つの境界線と重複部が段々と明確になっていった．今回の APWS で，まだ 3 年弱ではあるが教員としての振り返りを再びできたこと，今後の研究とサービスの指針のひとつを得ることができた，という非常に有意義な WS となった.

ここからは，本稿の趣旨からは少し離れるが，今回の WS は，メンターの人数が不足気味だったために，私のメンターは本校教員であった．本校の TP･APWS においては，できるだけ専門分野の異なる人がペアになる，顔は知っているけど今まであまり一緒にしたことがない，という組み合わせの方針がある．今回の私の場合は，これら 2 点を満たさないペアとなった．しかし，メンター・メンティーの距離感をある程度保つことができれば充分ではないか，また，顔を知っているからこそ的確な助言をできるのではないか，という今後の WS におけるペアの組み合わせについて，何かしらの参考になったのではないかと思われる.

山下香　TP・APWS の存在は，オンライン講座であるインタラクティブ・ティーチングの講師である栗田佳代子先生から教えて頂き，2016 年冬に TPWS，2017 年夏に APWS に参加した.

TP･APWS では，メンティー（TP･AP を作成する者）はメンター（既に TP・AP を作成した経験を持ち，メンティーに気づきを促す者）によるメンタリング（面談）を通して，教育理念と日々の教育活動とのつながりに気づく.

私の場合，一級建築士事務所での設計活動，まちづくり団体での活動，大学での初年次教育と専門科目における教育活動，というように複数のフィールドで活動をおこなっているが，両ワークショップを通して，日々の教育活動でのシラバス，授業設計，学生への指導，さらには教育以外の諸活動も，自分自身の教育理念に紐付けられていることを，メンターを通して気づくことができた.

TP･APWS の意義は，メンティー自身が無意識でこだわっている点や大切にしている点に気づく機会を，メンターが面談を通して提供し，メンティーが教育理念，さらには日々の活動と教育理念との関わりという大きな枠組みに気づくという仕組み，さらに，メンティーがメンターに成長し，新たなメンティーに気づきの機会を提供するという循環的な仕組みにあると感じる.

TPWS では，メンターである金成明美先生との面談を通して，自身の教育理念は，「人口減少社会という不確定な未来において自分自身の人生を作り上げる人材の育成」であることに気づくことができた．具体的には，(1)自分が置かれている状況を認知し，(2)人生の選択肢をできる限り持ち，(3)「考える力」，「行動する力」を用いて必要な選択をすることで，不確定な未来を生き抜く力を持つ人材を育成する．また，「実践」と「理論」の往還を重要視していることに気づいた．APWS では，メンターである金田忠裕先生との面談を重ねる中，人口減少社会という不確定な未来において自分自身の人生を作り上げる人材を，「大学」「建築」「地域」というフィールドで育成することが，活動に共通する目的であることに気づくことができた.

TP で得た気づきをヒントに AP に臨んだことで，複数の活動が有機的につながっていることを知った結果，全体像と現在の活動の位置づけを俯瞰できるようになった．この経験を，是非体験してもらいたく，親しい仲間に参加を勧めている．同時に，自信はないがメンターとして参加することが，TP･APWS が継続するシステムに少しは貢献できるのではないかと考えている.

松野高典　2017 年 8 月 8 日より 8 月 10 日に大阪府立大学高専にて開催された WS に参加させて頂き，AP を作成した．2011 年に TP を作成し，それ以後折に触れ，教育活動の振り返りを行い，自分が実施する教育活動のエビデンスを組み入れつつ TP の細部の更新をやってきたが，AP の作成は今回が初めてである．TP の作成や更新は，自分の教育活動の現状を把握しつつ教育を改善することに役立つと思っている．今回の AP 作成では，教育活動だけでなく，研究，管理運営・社会貢献も含めた総合的な活動への省察を行うことになった．自分の専門は数学である．教育と研究との関連では，数学に対する審美眼の大切さを認識し，教育と管理運営・社会活動との関連では，協調性や連携の大切さを改めて実感できた．また，研究と管理運営・社会活動との関連を振り返っていると，数学の知識，例えば暗号理論などの知識を公開講座などを通じて社会に還元していくことの大切さや，数学研究室の同僚教員と役割分担をしながらイベントを作り上げていく楽しさ，協調性を持って計画的に仕事をしていくことの重

要性に気づかされた. 20 年前に教員に採用された時には自分個人の実施する教育や研究ばかりに意識が偏っていたように思うが，今は学生に対する思い，同僚教職員に対する思い，社会活動で関わる人々への思いをたえず振り返りながら，より良い仕事をしていきたいと思うようになっていることに気づいた．日々忙しく月日が流れて行く中で，自分の仕事に対する思いや取り組み状況をゆっくりと振り返り，整理することができたことは貴重な経験であった．メンターの先生との面談を通じて，自分が実施している多様な仕事の中に共通する姿勢や思いが見えてきたときには, AP を作成して良かったと思えた．最後に，このワークショップを企画してくれた同僚教員，特に根気強くメンターとして相談相手になってくれた鯵坂先生に深く感謝申し上げる．

4.2　メンターとして

鯵坂誠之　この度，2017 年の夏に AP のメンターを初めて経験させて頂いた．TP であろうと，AP であろうと，私自身のスタンスが変わるわけではない．私がこの WS において最も重視しているのは，メンティーの「表情」である．今回のメンティーは，ベテラン教員であり，担任経験や校務分掌などの経験も豊富で，スタートアップシートを拝見した段階では，私の付け入る隙が見当たらないほどであった．また，ご自身の専門性にも自信と誇りが感じられ，あと少しポイントを整理すればポートフォリオをまとめていく上でもあまり問題がなさそうであった．しかしながら，初回のメンタリングの際に相対したその方の表情は，非常に重苦しいものであった．その瞬間，私自身が AP のメンティーを経験した後に感じたことを思いだした．効率的に作業を進めるだけでは見落としてしまう点があるかもしれないこと, AP の核（コア）に気づくためには発想の飛躍が必要（な場合もある）ということだった．初回の表情を見たとき，これは時間がかかるぞ，と感じた．･･･と同時に，時間をかけようとも思った．二日目のメンタリングが終わっても，その方の表情はさえないままであった．作業時間やお昼の時間などにもチラリチラリと表情を盗み見していたのだが，徐々に良くなっていく兆しが見えるわけでもなく，重苦しいままであった．そのうち私自身が心配になってきた．そもそも，このスタンスで良いのだろうか．よくよく考えてみたら, TP のメンターは何度か経験しているものの, AP のメンターは初めてである．「私自身のスタンスが変わるわけではない」などといった驕った考え方が間違っているのではないか．時間をかけよう，という考え方も正しいのだろうか？もっと効率的に何かを促したほうが良いのではないか･･･．そういった葛藤が，私の中で生じていた．三日目はあまりメンタリングの時間が取れなかった．メンティーはカバーページ（プレゼン用の資料）をまとめなければならず，どこまでご自身の考えを整理されたのか，メンターである私にも分からないままに，最終日を迎えてしまったのである．プレゼンテーションの表情は，重苦しさからは多少開放されているようにも見えた．かといって晴れやかな表情とも言いがたかった．結局のところ，今回，メンターとしての私は，メンティーにとって良い伴走者になり得たのか分からないままに幕を閉じたのだった．

数日後，最終稿がメールで送られてきた．AP には必ず表紙をつけなければならない．その表紙の絵柄は自由であるが，メンティーの自撮り写真がアップでドーンと掲載されていた．少しだけ微笑んでいるように見えた．「その表情をワークショップで見せてよ」と思った．

東田卓　今年度，第 12 回では 1 名の第 13 回では 1 名の AP メンターをさせていただいた．第 12 回では TP 1 名，AP 1 名でメンタリングの時間調整に苦労したことを覚えている．皆さん，教育実績もあり，研究やサービスを熱心に取り組まれている方ばかりで，メンターとして大変勉強になった．特に第 13 回ではある大学の学長補佐の先生で，教育・研究・サービスとも実績が多く，この取り組みを自分の大学に持ち帰りたいと言う強い意志があり，非常に共感し熱心にメンタリングすることができた．

12 回の 1 名の方は本学の方で，研究・教育・サービスのうち，前職が現在の研究と大いに違うため，研究実績が博士課程の時の研究に限られていることを悩まれていた．これまでを振り返っていただきながら，AP 執筆のうち，研究は未来志向的に書かれてはいかがかとアドバイスをさせていただいた．また，これまでを振り返られる過程で比較的にネガティブに書かれていたため，これらを肯定的にして現在の研究に活かせるよう，ポジティブに書かれるようにアドバイスをしたところ，大変流れの良い AP を仕上げられた．AP を書くことにより自分の立ち位置を振り返り, 未来志向的な AP にもなるのだろうと感じられる．TP 同様 AP も非常に自由度が高いので，自分の想いを綴った AP を書くことも可能である．「人生は工学である」という思いが大変良く伝わった．

もう 1 名は学長補佐のお立場で, 何としても学校を良くしたい，しかし，その思いは多くの教職員と共有しているものの，頑張れば頑張るほど先生方はますます疲弊されている様子を改善したいと管理職の立場をよく理解されている AP になりそうであった. スタートアップシートの着手段階で十分に振り返られていて, WS に向けた取り組みも熱心にしておられた．「大学をなんとかしたい」を

いう思いを強く感じた．当初書かれていなかったサービスとしての地域貢献も大いにされていて，それらを核にさらに三相図が深い関係になっていった．最終的にサービスは雑務では無いとまとめられ，雑務と考えるのは旧態依然とした大学観の元でしか通用しないとまとめられた．私も同感で TP より AP 執筆が自分にしっくり来たのはやはり現在行っている，「研究」「教育」「サービス」が渾然一体となって，どれが欠けても高等教育機関として成り立たないと感じたからである．また，この方は頭字語（acronym）を大変ユニークに使われて，なるほどと思わせるキーフレーズを様々な点で使われていた．AP のまとめとして，Communicative, Academic, Responsible, Practice と最終プレゼンでまとめられ会場が盛り上がったのが印象的であった．最後に，TPWS を自分の大学に持って帰り，学内の TP 作成者数にも目標を持って挙げられたのが印象的であった．今後は多くの高等教育機関にこの取り組みを持って帰っていただき，教員に真の自己省察をしていただき，「明日への教育に対する活力」としていただきたいと願う．

4.3　スーパーバイザーとして

北野健一　今回，冬の WS において，スーパーバイザーを担当した．本校の WS は TP 作成 WS，AP 作成 WS，SP 作成 WS の 3 つを合同で実施している．その理由は様々あるが，一つには，ポートフォリオごとに WS を分けると，年に何回も開催しなければならず，運営側の負担が大きくなりすぎることがある．そのため，3 種類の作成 WS を合同で開催しているが，種類ごとの定員は定めていない．ただし，メイン会場のキャパシティの関係で，全体の定員は大雑把に決めている（約 12 名）．冬は，TP10 名，AP1 名，SP2 名，計 13 名の参加者があった．これを栗田佳代子先生（東京大学）と 2 班に分けて担当することになり，私は TP6 名，AP1 名，計 7 名を担当させていただくことになった．メンター側も私を含め 7 名（つまり 1 対 1）であったが，今回が初メンターという方はおられず，しかも，スーパーバイザー経験者が私以外の 6 名中 2 名もおられたので，非常に心強かった．

スーパーバイザーの役割は拙著[5]に書いているため，ここで詳細に述べることは避けるが，WS 前はメンティー全員のスタートアップシートをじっくり読み込み，すべてのメンティーの WS への準備状況を確認するとともに，メンターへのアドバイスを整理しておく．

WS 中は，メンティーから毎晩 23 時までに提出される原稿をじっくり読み込み，しっかり自己省察ができているか，理念が導出できているか，理念と方法に一貫性があるか，等いくつかあるポイントを抑えつつ，メンターへのアドバイスを整理する．日付が変わってから原稿を提出するメンティーもおられるので，先に睡眠を取っておき，朝早起きして読むことも多い．

3 日間に 9 回設定されているメンターミーティングでは，司会・仕切り役として，メンティー一人ひとりについて，丁寧に議論しつつも，脱線することなく，できるだけ時間内に終わらせるように心がけた．

本校で開催する WS では，私はコーディネーター役を担っている．今回は，スーパーバイザー，メンター，コーディネーターという 1 人 3 役であったため，今思い返してみても，一番に出てくるのは，「大変だった」という思いである．ただ，どんなに大変な WS であっても終わった瞬間には「開催して良かった」という充実感の方が大きい．今年も間もなくその季節がやってくる．この原稿を書いているのは，2018 年 8 月 6 日である．折しも，今日からちょうど 10 年前，私は，大学評価・学位授与機構（現　大学改革支援・学位授与機構）で行われた第 1 回の「日本型」TP 作成 WS に参加していた．その後，2009 年 1 月に本校で TP 作成 WS を開催してから次で 20 回，今年は 10 年という節目の年になる．今年はどんな WS になるのか，今から楽しみである．

5．APWS に関する考察

文部科学省は TP 導入を高等教育機関の教育改善の一環として推奨している[4]が実質あまり増加はしていない．2017 年～2018 年の間の TPWS を検索すると，主催校は本校，F レックス（福井），東京大学，芝浦工業大学，広島大学，佐賀大学，県立広島大学，都立産技高専，愛媛大学，阿南高専，東海大学（出張型を除く）であった．様々な理由があると思われるが，連続開催されていた WS が途中で途絶えた大学も多い．また，APWS 開催は更に少ないと予想され，文部科学省の目標はなかなか困難であろうと思われる．開催に当たっては資金的な問題もあり，文部科学省の目標達成のためには科研費等の外部資金が継続的に得られる仕組みが必要であろうと考えられる．

また，近年，小中高の教員を視野に入れたティーチング・ポートフォリオ・チャート作成ワークショップが東京大学を中心に盛んに行われている．本校でも大阪では初開催となる TP チャート作成 WS が本校 TP 研究会の共催で 2018 年 5 月 13 日に行われ，多数の先生が参加された．こちらの WS は半日で終了するため，TP に取り掛かるきっかけとして有用であると期待され，この WS 参加者が TPWS や APWS に今後参加してくれるものと期待したい．継続的な WS の運営のためには経済的な問題，

参加者の時間的制約，開催側の時間的制約など多くの問題があるが，本校では WS 有料化も視野に入れながら，今後も継続する方向を模索していきたい.

６．おわりに

本稿では，大阪府立大学高専の 2017 年度に開催した AP 作成 WS について報告した．2018 年度の AP メンティー，メンター，スーパーバイザーになられる方の参考になれば幸いである. 今後は TP だけではなく AP こそが本校を発祥とする教育改善のルーツになればと願う．近年中にこれらの報告をまとめ，アカデミック・ポートフォリオの著書として発刊したい.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP17K01001 の助成を受けたものです.

また，拙著に寄稿していただいた小山工業高等専門学校の上野哲先生，流通科学大学の山下香先生，県立広島大学の馬本勉先生に心より感謝したい.

参考文献

[1] 北野ほか，日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して，大阪府立高専研究紀要，第 43 巻，pp. 63-70(2009) .
[2] ピーター・セルディン，J.エリザベス・ミラー著，大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳，アカデミック・ポートフォリオ，玉川大学出版部(2009).
[3] 金田ほか，日本初単一教育機関内アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して，大阪府大高専研究紀要，第 46 巻，pp. 71-76(2012).
東田ほか，2012 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 47 巻，pp. 43-48(2013).
東田ほか，2013 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 48 巻，pp. 37-42(2014).
東田ほか，2014 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 49 巻，pp.55-62(2015).
中谷ほか，2015 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 50 巻，pp. 91-94(2016).
金田ほか，2016 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 51 巻，pp. 61-64(2017).
[4]平成 27 年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要），文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室，平成 29 年 1 月 21 日.
[5] 大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著，実践　ティーチング・ポートフォリオ　スターターブック　～実質的な教育改善活動を目指して～，NTS 出版(2011).